『金史』に現れる人物「障葛」について 安田公男

問題の所在

テムジン (チンギス・カン) が遊牧部族を制覇する過程において、幼き日の友人であったジャムカとの友情や対立は『元朝秘史』など史書に紙幅を割いて描かれている。しかし、ジャムカの人物像には不明な点が多い。とくに彼はテムジンに対して執拗なライバル心を見せるが、その理由を深く知ることも困難であった。それは登場する史料が限られていることと、記述が断片的であることに原因があった。

そのような中、筆者は『金史』を検討していて、たまたまジャムカではないかと思える人物名を見出した。それは「障葛」である。障葛は現代漢語では zhangge と発音し、ジャムカ Jamuqa の名を想起させる。もしそれがジャムカだったとしたら、不明な点が多かった彼の実像を解明するための一助になると期待できる。そこで本論では「障葛」について、若干の考察を試みる。

史料にみる障葛

当該の記述は『金史』巻 98 完顔匡伝にある。

「初、匡行院于撫州、<u>障葛</u>将攻辺境、会西南路通事黄掴按出使烏都椀部知其謀、奔告行院為之備、迎擊障葛、敗其兵。」(2166 頁)

その内容は、おおよそ以下のようであろう。完顔匡が撫州の行院(行枢密院)に赴任した頃、西南路通事の黄掴按出が、烏都椀部から障葛の進攻の情報を入手し、行院に通報した。匡は防備を固めて障葛を迎え撃ち、それを破った。なお、撫州は現在の河北省張北県の治所付近であり、金朝の和戦両面における北方鎮撫の要衝であった。

完顔匡は『金史』巻 11 章宗本紀によると、明昌七(1196)年十月に撫州の行枢密院に着任し(「簽書枢密院事完顔匡行院於撫州」240頁)、承安四(1199)年正月に尚書右丞に昇任している(「簽枢密院事完顔匡為尚書右丞」249頁)。完顔匡が撫州行枢密院を離任した時期を史料からうかがい知ることはできない。だが、尚書右丞になった時点で撫州を離れたと考えれば、完顔匡が撫州で障葛を撃退したのは、明昌七年十月(1196年末)から承安四年正月(1199年初)の間ということになる。

ここにあらわれた障葛について、過去に言及しているのは、管見によると外山軍治だけである。ただ、外山は障葛を遊牧民の一派と推定しているが、何部に属するのか不明だと述べているに過ぎない(外山 1979:484 頁)。はたして障葛とは、どのような人物だったのか。

障葛とジャムカ

障葛は現代漢語の発音では zhangge と表す。だが、『金史』が編纂された元代の発音を

確認する必要がある。そこで『中原音韻』に注目する。『中原音韻』にもとづく元代に使われた漢字近代音の復元案に従うと、障*tşian、葛*ko である(李・周 1999:248,341 頁)。

この障葛*tṣiaŋ-ko Zhang-ge は 2 音節だが、『元朝秘史』『聖武親征録』『元史』といった主要な史料で、ジャムカはいずれも「札木合 Ja-mu-qa」と書かれ、明らかに 3 音節だ。なぜそのような違いが生じたのか。この点について私見を述べたい。Ja-mu-qa は第 2 音節の mu にアクセントがあったと考える。だが、金国人か漢人は、自国語に合わせて語頭の ja にアクセントを置いて発音したのではないか。現代日本人も ja にアクセントを置く傾向があると思う。そうしたことにより mu の u 音が弱くなって Jam-qa のように 2 音節になったのではないか。

そうだとすると、末子音 m が残っていた当時の漢字近代音では、jam に対し「斬*tşam」 あるいは「站*tşam」の字(李・周 1999:453,459 頁)を使いそうなものである。しかし、m に後続する k/q の影響で、同じ鼻音の n に変化していたと考えれば、「障*tsian」が使われたとも理解できよう。

一方、「葛」はモンゴル語の ca、qa、ha、kə、hə の音訳字として用いられ、同音に用いられた漢字としては他に「合」もあったという(中村 2010:2 頁)。『元朝秘史』『聖武親征録』『元史』といった主要な史料で、ジャムカ Jamuqa にはいずれも「札木合」と漢字が当てられていた。この部分は「葛」=「合」=qa で、完全に一致していると言えよう。

筆者は以上のような検討を踏まえて、障葛*tsiankoがジャムカ(札木合)Jamuqa を指すと判断したい。

撫州侵攻の背景

明昌七 (1196) 年六月、金朝の尚書右丞相の完顔襄はモンゴル高原奥深くに大軍を率いて侵入し、オルズ (ウルジャ) 河畔にてタタル部族の一派を滅した。いわゆるオルズ河の戦いである。その時に襄の喜びは大きく、「九峰の石壁」に女真文と漢文で戦勝碑文を残したほどであった (白石 2001:62-67 頁)。この勝利の背景には、ケレイトのカンであったトオリルと、モンゴルのカンであったテムジンの二人の協力があったとされる。

ジャムカ(障葛)による無州侵攻が1196年末から1199年初めの間に起こったとすると、 それはオルズ河の戦いの直後だったと言える。筆者はそこにジャムカの二人に対する対抗 心と金朝に対する敵対心を看て取る。

1199年のテムジン・トオリル連合軍によるナイマンのブイルク・カン征討作戦で、ジャムカがテムジンとトオリルの仲を裂こうと画策したのも、金国に協力する二人の関係を崩したい意図であったと考えられる。

さらに 1201 年、ジャムカは「グル・カン」に推戴された。『元朝秘史』141 節には彼を 推戴した部族長名が列記されているが(小沢 1995:118-121 頁)、カタギンとサルヂウトと いった弱小氏族長の名が、ウンギラト(コンギラト)やナイマンといった大部族長よりも 先に挙げられている。金国侵攻で名を馳せていたこれら氏族とジャムカとの深いつながり が看て取れる。

なぜジャムカがテムジンとトオリルに敵愾心を持ち、さらには金朝に対抗したのか。それには当時のモンゴル高原の政治状況が深く関連する。モンゴル高原の遊牧部族は金朝派と西遼派に分かれて、二大国の代理戦争を繰り広げていたとされる。その中でジャムカは西遼派であったと考えられている(松田 2015:14 頁)。

ゆえにジャムカは金朝派であったテムジンとトオリルの中を分断しようと画策していたのであり、みずからも金国の要衝であった無州への侵攻を行なっていたのである。彼が金に敵対する諸族から推戴された「グル・カン」とは西遼の首長と同じ称号(松田 2015:14頁)であったことからみて、彼が西遼派の中心的人物であったことは間違いない。その名前が敵側の『金史』に残ったとしても、何ら不思議ではない。

以上のように『金史』完顔匡伝の記事を解釈すれば、ジャムカの事績とチンギス・カン 勃興時の史料の欠落を幾分かでも埋めることができるだろう。皆さまの御意見を賜りたい。

参考文献

李珍華・周長楫(1999)『漢字古今音表』中華書局、北京。

松田孝一(2015)「チンギス・カンの国づくり」(白石典之編)『チンギス・カンとその時代』 1.28 頁、勉誠出版、東京。

中村雅之(2010)「葛・合などの元代北方音について」『KOTONOHA』91号、1-3頁、 古代文字資料館、愛知県長久手。

小沢重男(1995)『元朝秘史全釈』(下)風間書房、東京(初版 1986)。

白石典之(2001)『チンギス=カンの考古学』同成社、東京。

外山軍治(1979)『金朝史研究』同朋舎、京都(初版 1964)。

史料

『聖武親征録』無名氏:王国維(1983)「聖武親征録校注」『王国維遺書』8、261-440頁、 上海書店出版社、上海。

『元朝秘史』無名氏:小沢重男(1995)『元朝秘史全釈』(下)風間書房、東京(初版1986)。

『金史』脱脱:(1975)『金史』中華書局、北京。

『中原音韻』周徳清:李珍華・周長楫(1999)『漢字古今音表』中華書局、北京。

『元史』宋濂:(1976)『元史』中華書局、北京。